

ギリシアとインドの邂逅：貨幣の形態と製造法

アレクサンドロス大王(在位 336-323 B.C.)の没後、その東征軍の一部が興した王国の一つにギリシア系のバクトリア王国がある。ヒンドークシュ山脈の北側すなわちウズベキスタン東南部からアフガニスタン最北部一帯が故地となっており、この地ではギリシア文字の銘文をもつギリシア様式の貨幣が発行された。いうまでもなく、これはアレクサンドロス大王が発行したギリシア様式の貨幣の影響によるものである。その後、バクトリアの勢力はヒンドークシュ山脈を越えて、インドの西北部に進出し、ギリシアの貨幣様式とインドの貨幣様式が会うこととなった。このギリシアとインドの邂逅により、貨幣においてもいくつかの新たな展開があった。そのうち以下の三点につき確認をする。まず形態と製造法につき確認し、二言語併用貨幣については次項で述べることとする。

- 一、方形のギリシア様式系の貨幣が作られた。
- 一、金型打刻のインド貨幣が作られた。
- 一、二言語併用貨幣が作られた。

■ 方形のギリシア様式貨幣

さて、バクトリア王国のギリシア人諸王のうちデメトリオス 1 世(在位 200-185 B.C.)はヒンドークシュ山脈を越えてインドの西北に進出した王であり、これ以降の諸王の貨幣とヒンドークシュ山脈以北にとどまっていたころの諸王の貨幣とは異なる面がある。なおバクトリア諸王の系譜と在位年は前田 1992 による¹。

田辺 1992 によると、ギリシア系のコインは円形であるがインド西北に進出した諸王は、円形貨幣を発行しつつその他に、インド貨幣に倣った方形の銅貨を新たに導入したという²。以下に紹介する貨幣は比較的早い時期の方形の銅貨である。エウクラティデス 1 世(在位 171-155 B.C.)の発行した貨幣とおもわれる。



表



裏

¹ 146 頁参照。

² “インド・ギリク朝の諸王は、……。また、ギリシア系のコインは円形であるが、マウリヤ朝下で発行されていたパンチ刻貨の方・矩形コインに倣って方形の銅貨を新たに導入した”(55 頁)。なおここでいうインド・ギリク朝という名称であるが、田辺 1992 によると“ヒンドークシュ山脈以南だけを統治したギリシア人王をインド・ギリク朝といってグレコ・バクトリア朝と区別している。”(55 頁)ということである。一般には、デメトリオス 1 世の息子デメトリオス 2 世以降ヒンドークシュ山脈以南を統治したギリシア人の王国をインド・ギリク朝というようである。

表には王の右向き肖像があり、その周囲にギリシア文字で記されたギリシア語で“偉大なる王エウクラティデスの”とある。裏にはギリシア神の騎馬像があり、その上と下にカローシュティー文字で記されたインド西北地方の言語で“大王エウクラティデスの”とある³。田辺 1992 にあるように、これは方形化したギリシア様式の貨幣ということなのであろう。

■金型打刻のインド貨幣

インド貨幣の形態には、円形・不定形・長方形・正方形などさまざまなものがあるが、方形貨幣をもつことが特徴となっている。製造法であるが、打刻印銭(素材の片面もしくは両面に様々な印を打刻した貨幣)・金型打刻銭・鑄造銭の三種がある。このように製造法は出揃っているが、初期の貨幣は打刻印銭であり、この貨幣の存在がインド貨幣の特徴の一つとなっている。打刻印銭は打刻銭の一種であるが、ギリシア貨幣のように全面を覆う金型で挟み込んで打刻するのではなく、マークを一つ一つ打刻したものである⁴。

さて、この貨幣はインドの金型打刻銭であり、ジヨハン・ウリアズ⁵ 1998 に類似の貨幣が紹介されている。



表



裏

その紹介によると、この貨幣は紀元前 2 世紀の発行者不明の銅貨で、インド西北のペシヤワール(旧ガンダーラの地)あたりで打刻されたものであるらしい。見てのとおり、表は象を示し裏はライオンを示し、ライオンの背の上方には卍印がある。デザインの内容はインド的であるがその取り扱いはギリシアの伝統にそっており、コインもギリシアの技術を使って2つの金型のあいだで打刻しているという。以上を要するに、インドの貨幣様式が、ギリシアの貨幣様式と接触し、デザインにあっては写実的となり、製造法にあっては打刻印から両面金型打刻という方法を採用するに至ったということである⁵。

もっとも、表は金型打刻として、裏は地金の幅に比して金型面が小さく、ギリシアの両

³ 中村 2004 参照。

⁴ ジヨハン・ウリアズ 1998 の 172-173 頁およびグプタ 2001 参照。なお、インド貨幣の日本語概説として平野 2003 が参考となる。

⁵ 製造技術の変化について、グプタ 2001 の「第 5 章北インドの地方貨幣(後マウリヤ朝から前グプタ期)」に“この時代に製造されたその他の貨幣は、鑄型から鑄造されるか—これはマウリヤ期の銅貨に使用された技術である—、あるいは打型を使って造られた—これはインド・ギリシア人の時代に導入された技術である—。”(39 頁)としてこの貨幣が紹介されている。

面金型打刻による貨幣とはいささか様相を異にする。この点については、先に紹介したエウクラティデス 1 世の貨幣と比較していただきたい。

【参考文献（発行年順）】

田辺勝美編 1992. 『[平山コレクション]シルクロードのコイン』, 講談社。

前田耕作 1992. 『バクトリア王国の興亡』 (レガリス文庫), 第三文明社。

ジョージ・ウィリアムズ編/湯浅赳男訳 1998. 『図説 お金の歴史全書』, 東洋書林。第 1 刷 1998 年, 第 2 刷 2002 年。

P. L. グプタ著/山崎元一他訳 2001. 『インド貨幣史 —古代から現代まで』, 刀水書房。もと 1969 年発行。

平野伸二 2003. 「古代インドの打刻印貨幣と土着の貨幣 —ブッダの時代から 3 世紀頃まで—」, 『収集』
Vol. 28 No. 3, 10-17 頁。

中村雅之 2004. 「カローシュティー文字貨幣 3 種」, 『KOTONOHA』 第 22 号, 1-3 頁。

(文責: 吉池孝一 2010. 5. 18)